

陽ざしがやわらいだ午後でありました。夏の名残を帯びた風が、台所の小さな窓をそつと揺らし、庭の萩の花がひらりと落ちるのが見えました。古びた木のテーブルの前に座り、戸棚の奥からあのガラスのうつわを取り出しました。六十年前、母が結婚の祝いにくれた、夫とおそろいのグラス。薄く、透き通るその姿は、若かった私の心のようにありました。「新しい時を刻みなさい。」と母は微笑み、二人分のグラスを手渡してくれました。あの日、未来はどこまでも澄んでおりました。今、細かなひびが幾筋も走り、金で繕われた線が陽光にきらめきます。氷をひとつ、ころんと落とし、水出しの茶を注ぎました。ぱり、ぱり、と小さな音が響き、氷に繊細なひびが生まれました。透明な世界に、茶の色がじわじわと染み込む姿が、まるで時が色を帯び、グラスの中で息づくようでありました。私はその光景を見つめます。氷のひびと、このグラスが重なる瞬間。それがなんとも愛おしく、静かに響き合う一瞬でありました。

このグラスは、物語の器でありました。夫と二人、狭い借家の台所で、初めてこのおそろいのグラスにお茶を淹れた日のことを思い出します。夫は不器用に笑い、「こんな薄いガラス、すぐ割れそうだな。」と言いました。私は「大切にすれば、ずっと。」と笑い返しました。母の言葉を胸に、新しい時を刻む喜びに満ちておりました。あの頃、時間は無限に思え、未来は希望の光で輝いておりました。けれど、時はひびを刻むもの。癒すのもまた時でありました。

最初のひびが入ったのは、娘が生まれた夏の日のことです。夫がグラスを洗っていて、うっかり滑らせ、かちんと音が響きました。「ごめん」と彼は慌てましたが、私は笑っておりました。娘の泣き声が響く家で、そのひびは娘の命の重みが刻まれたようで、嬉しかったのです。私にとって、壊れた印ではなく、生きている証でありました。以来、グラスは私たちの時を宿してきました。娘が初めてスプーンを握った日、夫と静かに言葉を交わした夜、孫たちが庭で笑う夏の昼。ひびは増え、金で繕うたびに、グラスは人生の重みを帯びました。完璧ではないけれど、傷も、笑いも、涙も、すべてを抱えてなお輝くもの。金の線は、壊れたところを隠さず、むしろ愛おしいものに変えておりました。その姿と自己を重ね、さらに大切にしていこうようになりました。

夫はもうこの世にいません。あの人は、風のように静かに去りました。去年の秋、萩の花が散るころでありました。陽が傾き、部屋が茜色に染まるころ、私はこのグラスを手にも、ただ佇んでおりました。ひびに光が差し、まるで夫の声が聞こえるようでありました。「壊れても、捨てなきゃいいんだよ。」と、彼はよく言いました。きっと、傷も含めて愛し続けることがガラスの記憶となる。そんな意味が込められていたのでしょうか。その言葉は、胸の奥を温めます。夫がいない今も、このグラスは私と共にある。おそろいのもう一つのグラスは、彼の不在を静かに語りながら、そばにいるかのようにありました。私より

も1年分若いグラスが、日々時の流れを感じさせます。今、氷が溶ける音が、時のしずくのように響きます。茶を飲み、グラスの底に残る色を眺めました。それは私の人生の色でありました。若い日の澄んだ色は遠く、喜びや悲しみが染みこみ、複雑で深い、けれど穏やかな色。氷のひびに茶が染み込むように、人生もまた、傷の中に記憶を刻みます。壊れたところにこそ、美しさが生まれると、このグラスは教えてくれました。

庭の萩が風に揺れるのが見えました。花びらがひらりと落ち、土に溶けていく。その瞬間、思いました。人生もまた、この花びらのようでありました。咲き、揺れ、落ち、そしていつか新しい芽になる。このグラスも、そうやって時を重ねてきたのです。ひびは壊れた印ではなく、生きた証。金で繕われた線は、命の脈のように光ります。私はグラスを手を、そっとつぶやきました。「ありがとう」と。それは夫へ、母へ、時へ、そしてこのグラスへでありました。母がこのおそろいのグラスをくれたとき、私はまだ知らなかったのです。人生がこんなにも多くの色を帯び、こんなにも多くのひびを抱えることを。時を重ねた今、思うのです。ひびがあるからこそ、このグラスは美しい。傷があるからこそ、人生は愛おしいのであります。

明日、またこのグラスでお茶を淹れようと思います。少し冷たく、ほのかに温かい、やさしい色の茶を。そして、孫たちが遊びに来たら、このグラスの物語を話してあげましょう。ひびの音が、時の色が、どれほど美しいかを。氷のひびに茶が染み込むその瞬間を、愛おしく見つめるように。「貴方たちの、転んだ傷跡も素敵なのよ。」と。人生もまた、ひびの中で輝くのであります。